

憲法しんぶん 速報版

発行 憲法改悪阻止各界連絡会議（憲法会議）

Eメール mail@kenpoukaigi.gr.jp
ホームページ http://www.kenpoukaigi.gr.jp

TEL03-3261-9007
FAX03-3261-5453

2016年7月22日（金）

第644号 本号3頁

朝日新聞紙上で、法政大の杉田敦教授と早稲田大の長谷部恭男教授が、参院選の結果を受けての連続会談で、「参院選で生まれた『改憲勢力3分の2』の意味について問い直す」との対談が、18日に掲載されています。

争点化せず、選挙後に豹変した安倍首相

長谷部氏は、この度の参院選の結果について、「参院選の結果は野党が1人区で11勝し。かなり善戦したと言えます。共闘していなければ、とてもここまで持ちこたえられなかったでしょう」と冒頭で述べ、杉田氏は「一部メディアが野党共闘は破たんしたと盛んに言っていますが、成功したから潰したいという意図が透けて見えます」と言い、改憲に前向きな「改憲勢力」の議席が3分の2に達し、安倍首相は「次の国会から憲法審査会を動かし、議論をすすめたい」と言っていると指摘。さらに、「安倍さんやその周辺は終始、憲法は参院選の主要な争点ではないと言ってきました。それに対して一部の野党は、安保法制などの経験からして、選挙後に安倍首相は豹変し、憲法についても信任を得たというに違いない、だから憲法は争点なのだと訴えた」とも指摘しました。それに対して長谷部氏は「そして予想通り、豹変した」と述べています。

そして、安倍首相が「いかにわが党の案をベースに3分の2を構築していくか。これがまさに政治の技術だ」と述べたことに対して、杉田氏は「国民に正面から問いかけることもなく、手続きだけ進めてしまおうということでしょう」と述べ、長谷部氏は「安倍さんにとって、民意というのは尊重すべきものではなく、操作の対象なのでしょう」と述べています。

さらに、杉田氏は「安倍さんはこの間、国民に国民投票で民意を尋ねるので、改憲項目の選定や調整は国会の役割であると強調しました。しかし、参院選でも、前回の衆院選でも憲法改正を争点化しておらず、国民が改憲を国会議員に委任をしているか、非常にあやしい。形式的には代表だからといって、議会に設置された憲法審査会が改憲項目についてどンドン議論をすすめることは、立憲主義の観点から果たして適切でしょうか」と、述べています。

「自己目的化した改憲」「その土俵に引きずりこまれるな」と指摘!

その後、憲法改正について、長谷部氏は「改憲が自己目的化して、やるべきでないことをやろうとしている」と指摘し、杉田氏は「いつの間にか、憲法改正自体は必要で、後はどこを変えるかだ」という風にずらされてしまっている」「よくよく注意しないと、改憲が自己目的化した人たちの土俵に引きずりこまれる」と述べています。

読んで「そうだ」「その通り」と、頷く内容の対談でした。

大橋巨泉氏が臨床で綴った”遺言” 「安倍晋三に一泡吹かせてください」 テレビ等一切報じず

長らく闘病生活を続けていた大物司会者の大橋巨泉氏が亡くなりました。自身が連載していた「週刊現代」（講談社）のコラム「今週の遺言」でも、3月半ば頃から体力の落ち込みがひどく、4月には意識不明の状態に陥り、2週間ほど意識が戻らず、5月からは集中治療室に入っていたと記

載していました。そのため連載は4月9日号を最後に休載となっていました、7月9月号をもって最終回とするとなったとのことです。その最終回の原稿では、

「体力が戻ってこず衰えた。何時まで生きられるかわからない。老いた体をベッドに横たえ、たまに車椅子で外に出れば直ぐに高熱を出す始末である。ボクにはこれ以上の体力も気力もありません」

と、死をも意識する重篤な病状にあることを繰り返し綴っています。深刻な状態だったようで、この最終回の原稿も、妻と弟のサポートを受けて何とか完成までもっていったものだとのことです。その最終回の原稿の最後は、こんな文章で締められています。

「今のボクにはこれ以上の体力も気力もありません。だが今も恐ろしい事や言いたい事は山ほどある。このままでは死んでも死にきれないので、最後の遺言として一つだけは書いておきたい。安倍晋三の野望は恐ろしいものです。選挙民をナメている安倍晋三に一泡吹かせて下さい。7月の参院選挙、野党に投票して下さい。最後のお願いです」

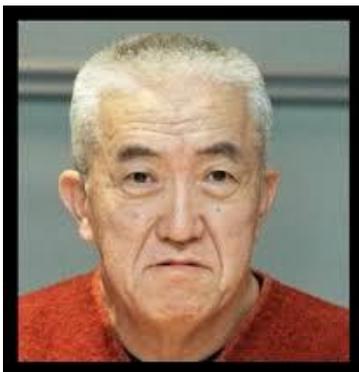
このように「何時まで生きられるかわからない」「ボクにはこれ以上の体力も気力もありません」と死を意識する壮絶な状況のなか、巨泉氏がまさに最後の力を振り絞って綴った、「最後の遺言」。それは、「改憲」を争点からひた隠しにして参院選を行い、着実に日本を戦争へと向かわせている安倍政権への痛烈な批判でした。

しかし、盛んに大橋巨泉氏を悼む報道が行われているが、「最期の遺言」の報道は報じてられていません。



永六輔氏 自民の改憲草案を「ちゃんちゃらおかしい」と痛烈批判していた！

－総理が改憲と言い出すのは憲法違反とも－



7月7日に永六輔氏が逝去しました。永氏といえば「上を向いて歩こう」「見上げてごらん夜の星を」「こんにちは赤ちゃん」の作詞など、戦後を代表するタレント、作詞家でしたが、戦争そして憲法について繰り返し語ってきたことでも知られています。

あらためて永氏の憲法そして反戦への思いをあらためて振り返ってみます。

市民が「改憲ハンタ〜イ」なんてデモするのは、けっして

平和な状況ではない

「現代」06年6月号／講談社

本来、一般市民は憲法なんて気にしなくてもいい、それが平和な世の中というものですよ。市民が『改憲ハンタ〜イ』なんてデモするのは、けっして平和な状況ではない。憲法はあくまで国の舵取りをする政治家や役人、つまり為政者を縛るための法律なのであって、国民は憲法に縁がなくとも、幸せならそれでいいんですよ。

憲法は為政者を縛るためのもの。大事なのは「99条を守ることだ」。

「現代」05年8月号／講談社

憲法議論でいうとね。第9条ばかりに目がいきがちだけど、条文の最後のほうの第99条には、憲法をまとめるように、『天皇又は摂政及び国務大臣、国会議員、裁判官その他の公務員は、この憲法を尊重し擁護する義務を負ふ』とあるんですよ。この大事な99条にまで議論が及ばない。

毎日新聞 13年5月23日付夕刊

(99条は) 憲法を変えてはいけないという条文です。天皇陛下といえども変えられない。それなのに国会議員が変えると言い出すのはおかしいでしょう。国民に義務を課すなんてちゃんちゃらおかしいですよ。憲法は国民を守るためのルール。それなのに99条を変えると言い出すなんて、政治家が憲法を勉強してこなかった証しです。

◆戦争を体験した永氏。次のような憲法改正案も。

「二度と飢えた子供の顔は見たくない」。これだけである。「創」13年9・10月号／創出版

僕は憲法はこれでいいと思うんです。条文を書き連ねるんじゃなくて、この言葉の中に全部盛り込まれていると思う。戦争の問題、貧困の問題、教育・福祉の問題。僕は戦争が終わって、最初に選挙する時、興奮したし感動もしました。その感情がいまは無くなってしまった。だからもう一度元に戻して、『二度と飢えた子供の顔は見たくない』という、たった一行、世界でいちばん短い憲法にしたらどうかと思うんです。

◆安倍首相によって、70年ものあいだ、日本を戦争から守ってきた憲法が破壊されようとしている今、いまいちど、永六輔氏が残された言葉を考えてみたいものです。

各地のとくくみ

愛知 「選挙が終わったら改憲を言い出す安倍首相は許せない」と若者たち、自民党県連前で声をあげる!

名古屋市の自民党愛知県連前で、19日、「選挙が終わったら改憲を言い出す安倍首相は許せない」との若者の声が響きました。この街宣行動を行ったのは、安保法廃止と安倍首相の暴走に反対する愛知県の若者で結成した「ストップ・イット・アベ名古屋アクション」です。

自民党県連がある官庁街の昼休みに、若者の「安倍はやめろ」と記した横断幕を掲げ、「憲法改悪絶対反対」「憲法守らぬ総理いらない」などと元気にコールしました。

同級生に自衛隊員がいるという野澤康幸さんは「選挙中に首相は改憲のことを一言も言わなかったのに、選挙が終わった途端に言い出したのは許せない」とマイクを握りました。航空自衛隊の小牧基地の隣町に住む30歳の男性は、空中給油機やオスプレイが同基地に飛来していることについて、戦争する国づくりが急ピッチで進められている表れだと述べ、他国を攻めるための基地機能強化はただちに中止をと強調しました。医学部6年生の女性は、何か行動したくてツイッターを見て初めて参加。命を守るのが医師の仕事だとし、命を奪う戦争する国づくりをすすめる安倍首相に異議を唱えました。

群馬 群馬共同センター10回目の「19日を忘れない!」昼デモ

群馬県憲法共同センターは19日、前橋市で10回目の「19日を忘れない!」昼デモに取り組みました。約60人の参加者は「戦争法廃止」「美ら海埋め立てるな」などのプラカードを掲げ、「憲法改悪を許さない」「武器と原発輸出させないぞ」と唱和し、県庁前通りを行進しました。

出発前に、県労働組合会議の真砂貞夫議長が主催者あいさつ。16日に行われた「ぐんま市民連合へいわの風」の総括会議で、憲法改悪阻止も掲げ、群馬の野党とも手を合わせて運動を継続すると確認しあったと報告し「お互いの力を合わせて大きな前進をやりとげよう」と訴えました。